

『愛泉三君畫像』見学記

其の一 淳豊堂 吉田昭二

近畿地方も梅雨入りして間もない令和二年六月十二日(金)、J.R嵯峨野線の円町駅から快速電車に乗り込み、園部駅で山陰線に乗り換えて福知山に向かいました。

京都市内は小降りでしたのに丹波山地を縫うように走る電車は、胡麻駅辺りからの車窓から見える空は真っ黒な雲に覆われ、大粒の雨が窓を叩き、それに合わせて電車の速度も遅く駅での停車時間も長くなりました。

と、車内放送が、「進行方向の綾部市付近に大雨注意報が出されており、この電車も徐行運転を行って……」——まさか運行停止にならないか、一瞬、そんな不安が過りました。

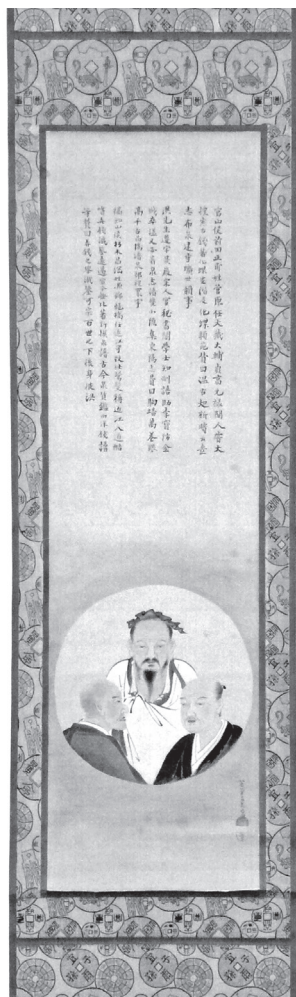
福知山へ行く予定は四月初旬だったのでですが、思わぬコロナ禍で外出自粛となり、この日を心待ちにしていましたからまた駄目になるのかと心配したのですが、電車は三十分近く遅れながらも無事に福知山駅のホームに到着しました。駅前で待っていたいただいた同行くださる地元の新元正幸氏と、篠山からの平野勇氏と合流、雨の中、早速新元氏の車で福知山城へと向かいました。

大河ドラマ「麒麟がくる」の光秀の影響もあり、

平日でも再開後のお城は多くの見学者で入場制限を行っているようですが、生憎の雨が当方には幸いして来場者も少なく、天守閣の展示区画では目指す一幅の画像を思う存分鑑賞することができました。

その画像とは福知山第八代藩主、朽木昌綱公(くつきまさつな)を描くものとしては唯一とされる『愛泉三君畫像』であり、公を紹介する書籍にはこの写真が掲載されることが多く、それに逢えるのが楽しみで仕方がなかつたのです。

この春、福知山の多名賀基文氏が『両丹日日新聞』に連載されている「朽木福知山藩八代藩主」に関連し、貨幣関係の資料を些か提供した関係から福知山城天守閣に『愛泉三君畫像』が展示されていると、お知らせをいただきました。



軸装されて伝わる『愛泉三君畫像』
(写真提供：朽木家所蔵資料研究会)

お披露目

実は昨年、福知山城天守閣を見学していたのですが、その折にはこの画像の展示はなかったようで、拝見できる好機だと逸る想いで再訪したのです。

今更、昌綱公の来歴、事績を辿ることは不要でしょうが、古銭蒐集の黎明期に公の果たされた功績は計り知れず、それを再認識する為にも『愛泉三君畫像』は紹介すべきものと考え、些か判明した事案も含めて見学記として紙幅をお借りいたしました。

この画像が世に知られるようになったのは、昭和十三年十月十五日発行の『朽木昌綱公』村

上勇著（福知山中學校代表者と記す）と思われる、そこには「朽木子爵蔵」と記されています。

この朽木子爵とは第十四代・綱貞公（つなさだ）であり、綱貞は十三代・為綱公（もりつな、弘化二年～明治十六年）の実子で明治八（二八七五）年の生まれで昭和四（一九二九）年に他界されています。

村上本の出版時には逝去されていますから、朽木家から写真借用を受けて刊行までに日時を要したものかもしれません。

平成十一（一九九九）年に第十六代当主朽木彰氏（一九三五～二〇一七）が、朽木家重代の数々の遺品・資料を福知山市に寄託されています。その中にこの画像も含まれており、その間の事情は地元紙にも紹介され、同年に特別展が開かれて一般にも公開がなされていました。（附記①）

画像の所在

昌綱公を知るうえで好著の『情報大名 朽木昌綱』小出 進著（一九九四年 講談社）の中で、著者は画像を「福知山高校蔵」と明記されていますが事実関係は如何なのでしょう。

関係者のお話しによれば、明治以降、朽木彰氏が市に寄託されるまでの間に福知山に持ち込まれたとの記録は見当たらないようで、なるほど同校の前身であります福知山中學校（附記②）は、前述の『朽木昌綱公』刊行でもお判りのよ

うに公に対する思い入れは格別で、調査も綿密に行われ、実際、先立つことの昭和十年にもガリ版印刷の『朽木昌綱公事績調査備忘録』（附記③）も制作されているほどですから、同品が福知山中學校の後身である福知山高校に伝わる、と思われるのかもしれない。

いま一つ、『福知山市史』（昭和五十九年、福知山市史編さん委員会編集）第三巻の口絵にも「愛銭三君の像」の名称で一ページを使ってモノクロ写真が紹介されていますが、昌綱公の手紙など他の掲載品にはその所蔵者、機関が記載されているのにこの画像には何の説明文もないのですから、そこにも混乱を引き起こす小さな要因が潜んでいたのかもしれない。

元々、画像自体は何処に在ったものか、平成十一年に朽木彰氏に因って福知山に齎されたことは確かであり、後述する朽木絃綱（ひろつな）が入手して以降、江戸藩邸から福知山の国許へ、福知山から東京（関東）、そしてまた福知山へと行き来していたものか推察の域をでませんが、朽木家と行を共にしていたのではないでしょう。

初対面の画像

さて画像はアクリル板で隔てられた二メートル足らず先の壁面を飾っていました。

軸全体は落ち着いた茶の色調を帯び、画像は縦が86cm、横24cmの絹裂の下辺の円形の中へ、

中央に「洪遵」（こうじゆん）、右が「前田正甫」（まえだまさとし）、峯心齋（みねしんさい）、そして左に「朽木昌綱」の三人の上半身が描かれています。

その上方には、三君の事績を各々三行で評論され、右下には絵師の「芝蘭斎美之画」との署名があり、陰刻で「洞」、陽刻で「秀」と彫られているのでしょうか、お椀型の朱印二個が捺されています。

表装の裂地には穴あき銭を全面に配したものが用いられ、それが納められていた浅蓋の桐箱は、公の著作や真筆など関連資料の数々とともに画像の前面に展示されていました。

画像制作時期

これが描かれた時期に関して紹介された記事をみませんが、昌綱公の姿形と絵師の存在からして大凡の推定は可能ではないでしょうか。

ご存知のとおり昌綱は寛延三（一七五〇）年一月二十七日に六代藩主綱貞公（つなさだ）の長男として江戸で生まれ、安永九（一七八〇）年に従五位下隠岐守に叙任され、天明七（一七八七）年に家督を七代藩主・鋪綱公（のぶつな）から継いで八代藩主となり、寛政元（二七八九）年に初めて福知山に国入りをします。寛政六（一七九四）年には近江守と改め、寛政十二（一八〇〇）年に家督を倫綱公（ともつな）に譲って隠居し、剃髪して「近江入道」を名乗り、福知山を去って江戸・箱崎の朽木家中屋敷に移